企画セッション

「経済発展のメカニズムと政策・支援―石川滋先生の貢献と現代―」

報告　絵所秀紀（座長）

本セッションは、故石川滋先生が残された開発経済学および国際開発政策研究の分野での研究業績を本学会の共有財産として引き継ぎ発展すべく、柳原透会員によって企画されたものである。報告者・テーマは順番に、柳原透「開発経済学方法論での継承・発展―『市場経済発展　段階/類型』論と『適応』の政治経済学」、高橋基樹「経済開発研究での継承・発展―地域研究と歴史研究の視点から―」、下村恭民「開発政策・開発援助政策の領域における継承・発展」、大野泉「開発援助実践での継承・発展：ベトナム『石川プロジェクト』からエチオピア『産業政策対話』へ」、そして討論者として山形辰史および小林誉明両会員という本学会を代表するきら星のごとき布陣を配したセッションであった。

報告・コメントの内容は、十分に期待に沿うものであった。事前に提出された４つのペーパーはいずれもよく熟考された力作で、少なくとも各１時間程度の報告時間がほしいと思われるものであった。柳原報告は、まずは学問として継承すべきものとして石川の研究姿勢を挙げた。高橋報告は、石川が提出したアフリカ家産制国家論を批判的に継承すべきであると論じた。下村報告は、石川が開発の課題として設定した「国民経済の自立」と「途上国の人々の厚生」の両立という考え方を継承すべきものとして評価した。またベトナムに対する石川プロジェクトの「再現可能性」にかかわる議論は圧巻であった。大野報告は、ベトナムに対する石川プロジェクトの特徴として、「長期開発の視点、実体経済への関心、共同作業」を挙げ、大野氏が現在手掛けているエチオピア産業政策対話にこうした視点が継承されていると強調された。

本セッションへの参加者は約 60 名に達し盛況であった。３年後の 2018 年は石川先生の生誕 100 周年にあたる。その時に先生が残された学問をどのように継承すべきか、改めて本学会で是非とも取り組んでもらいたいテーマである。